

『バックカイ』上演と討議 「古典と現代」開催について

岡本 章

二〇〇九年十月十日に、本研究所と文学部芸術学科が主催し、舞台上演と討議が白金校舎アートホールにおいて行われた。舞台上演は、江戸糸あやつり人形座により新作のギリシャ悲劇『バックカイアガウェ篇』と、古典演目『茨木』の両作品が演じられ、また討議は、「古典と現代」と題されて活発に議論が交わされた。本文の筆者岡本は企画者として関わり、また『バックカイ』公演の演出に携わったが、以下その概要を簡潔に記しておきたい。

今回の企画は、討議のタイトルにあるように、「古典と現代」という重要な課題を、実際の舞台上演と、それを対象化する討議の両面から問い直す試みであったと言える。まず舞台上演に關しては、『バックカイ』に先立ち、古典演目の『茨木』が江戸糸あやつり人形座により演じられた。両作品が併演されたの

は、『茨木』上演により、長い歴史を持つ伝統芸を継承してきた、江戸糸あやつり人形の卓越した技芸が浮き彫りになり、続く新作『バックカイ』の意欲的な取り組みを通して、古典の演技の技芸がどのように現代に開かれ、新たに展開するのかわかることが目の当たりにされ、実践的に「古典と現代」の課題を捉え直すことが目指された。

『茨木』は、茨木童子の伝説を素材にした河竹黙阿弥作の松羽目物の長唄の舞踊劇で、江戸糸あやつり人形座の田中純氏が伯母の真柴を、結城一糸氏が渡辺綱を演じた。後段の綱の武勇譚と真柴の舞い、腕を見守る内に次第に鬼になっていく場面の凄みなど、両氏の細やかで絶妙の糸あやつりの技芸により、数十センチの大きさの人形が生命を持ち、動かし難い存在感を示していた。

一方、ギリシヤ悲劇『バツカイ』は、エウリピデス晩年の傑作であり、ここではディオニュソスとペンテウスの対立の中に、神／人間、宗教／政治、自然／文化、狂気／正気といった対立軸が緊張感を持って浮かび上り、根源的かつアクチュアルな問いかけがなされている。今回は、『バツカイ―アガウエ篇』（作・エウリピデス／高柳誠 構成・演出・岡本章）として、エウリピデス作『バツカイ』を踏まえながら、新たな切り口で書き下ろされた詩人高柳誠氏によるテキストを中心に原作も加え、母親のアガウエに一つの的を絞り構成された。また、この上演では、江戸糸あやつり人形、能、現代演劇、現代詩、現代音楽など多様なジャンルで活動する表現者が参加し、丁寧な共同作業が積み重ねられ、演劇言語、舞台芸術の可能性を切り拓くことが探られた。

全体は夢幻的な構造で構成され、作曲家細川俊夫氏の身体の根源に届いてくる深く緊張感のある音楽の中、それは第何回かの世界戦争後の廢墟のような、万物全てが消失した「無の場所」に、不思議に浮遊する、輪郭も形象も不明な魂魄（もの）がいつしか形を持ち、語り出す。その声に耳を澄ませてみると、例えばそれは古代ギリシヤ悲劇のアガウエの記憶にも、また存在の井戸を下降した場に眠る累々たる非業の死者たちの声にも聞こえてくる。そうした根底の場所から、『バツカイ』の様々な対立の世界、人間の営みがもう一度照らし返され、見つめ直

された。

ギリシヤ悲劇は、言うまでもなくヨーロッパ演劇の原点であり、また世界の文学の源泉でもある。今回の上演では、古典劇としてのギリシヤ悲劇が、現代という時代、状況の中でどのような意味を持ち、アクチュアルな問いを投げかけることが出来るのか、といった「古典と現代」の根底の課題が模索されていたと言える。同時に先にも触れたように、今回の『バツカイ』上演では、江戸糸あやつり人形、能、現代演劇の共同作業が行われた。ここでは日本の伝統演劇が持つ興味深い（変身）のあり方、語り物の構造が、現代演劇の重要な演技の問題として捉え直され、本来的な意味でのクロス劇として多層的な役や人格、そして人間と人形（もの）との自在な相互変換の位相も探求された。ここにも「古典と現代」の課題が浮上してくる。

さて、舞台上演後に行われた討議「古典と現代」では、岡本章の司会で、『バツカイ』公演に関わった詩人高柳誠、江戸糸あやつり人形の田中純、能シテ方櫻間金記、俳優笛田宇一郎の各氏が出席し、公演の狙い、問題意識、意義が、その具体的な舞台創造のプロセスを踏まえ語られた。その中から、古典としてのギリシヤ悲劇を現代にどう生かすのか、伝統劇と現代劇の切り結びの可能性など、これまで触れてきた「古典と現代」の様々な課題が多面的な角度から真剣に議論された。最後まで多数の観客が熱心に耳を傾けていた姿が印象的であった。